

# 一九五〇年代日本におけるアメリカ論ブームと安部公房：エッセイ「アメリカ発見」と＝J・サルトル、鶴見俊輔

大場，健司  
台湾・国立国防大學語文中心：専任教師

<https://doi.org/10.15017/4377917>

---

出版情報：九大日文. 37, pp.47-66, 2021-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 一九五〇年代日本におけるアメリカ論ブームと安部公房

——エッセイ「アメリカ発見」とJ・P・サルトル、

鶴見俊輔——

大場 健司

一、はじめに

これまで、一九五〇年代日本の文学や思想、芸術運動は、①西洋に抵抗する「アジア主義」、②アメリカによる「占領」に抵抗する「ナシヨナリズム」(Nationalism)、③ローカルな「サークル運動」といった視点で論じられてきた<sup>①</sup>。この三点に共通するのは、第二次世界大戦(WWII, 1939-1945)後の冷戦(Cold War, 1945-1989)におけるアメリカから日本や東アジアへの覇権戦略に対抗する「ナシヨナリズム」が前景化されていることだと言ってもよい。

しかしながら、ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson, 1936-2015)が『二つの旗のもとに——アナキズムと反植民地主義的想像力』(Under Two Flags: Anarchism and the Anti-colonial Imagination, 2005)において詳細に分析したように、「ナシヨナリズム」だけでなく「アナキズム」(Anarchism)もまた、「反植民

地主義」(Anti-colonialism)の想像力の根拠となつたのだ。アンダーソンが「地球の各地で発生した戦闘的なナシヨナリズムのあいだに働いていたアナキズムの秘めたる引力を地図上に描く試み」を行なったように、世界中の「反植民地主義」は「ナシヨナリズム」のみには還元され得ないだろう<sup>②</sup>。すなわち、「反植民地主義」を「ナシヨナリズム」に還元してしまうことは、「アナキズム」などによる非権威主義的な抵抗を見えなくしてしまうのだ。

そこで本稿では、これまで一九五〇年代の「ナシヨナリズム」との関係で論じられてきた、安部公房(一九二四—一九九三年)のエッセイ「アメリカ発見」(『中央公論』一九五七年一月号)を取り上げ、このエッセイが「ナシヨナリズム」には還元不可能な政治性を有することを論じていく。

第二次世界大戦後、一九五一年九月八日に署名されたサンフランシスコ講和条約(Treaty of San Francisco, 1951)を経て、日本はアメリカ軍基地問題を抱えながらも独立することになる。そして、冷戦期にソ連／アメリカの「力の非対称性」を前提にして、アメリカの主導で「国際冷戦レジーム」が形成されることになる<sup>③</sup>。その際に、日本はアメリカの東アジアにおける覇権戦略の拠点となり、朝鮮戦争(一九五〇—一九五三年)下での特需景気や五年体制を経て高度経済成長(一九五四—一九七三年)を迎えることになる。すなわち、戦後の日本は冷戦におけるアメリカの覇権戦略のもとで経済発展を遂げることになるのだ。

一方、日本の「マルクス主義」(Marxism)においては、一九

五〇年一月の段階でコミンフォルム (Kominform) によって当時の日本共産党の野坂参三 (一八九二—一九九三年) らの平和的な議会主義的戦略が否定される。そして、日本共産党はコミンフォルムの批判に反論した「所感派」/コミンフォルムの批判を容認した「国際派」に分かれることになる。その後、日本共産党第五回全国協議会 (五全協、一九五一年一〇月) で採択された「五年綱領」では、ヨシフ・スターリン (Joseph Stalin, 1878-1953) の論文「マルクス主義と言語学の諸問題」(Marxism and Problems of Linguistics, 1950) にもとづいて「民族解放民主政府」が目指され、「反米ナシヨナリズム」が掲げられることになる<sup>5)</sup>。

一般的に、「ナシヨナリズム」とは右派によって主張されてきたものである。戦後の日本では日本の民主化に対する「逆コース」(Reverse Course) が進み、一九五二年にはサンフランシスコ講和条約と同時に公職追放令廃止法が施行されると多くの右翼団体が設立されることになる。しかし、こういった戦後の右翼団体では親米的な立場を取ることが多く、一九五〇年日本において「反米ナシヨナリズム」は当時の「左翼ナシヨナリズム」(Left-wing Nationalism) に顕著な主張だったと言つてもよい。このように、一九五〇年代における「ナシヨナリズム」は、右派のみならず左派によつても形作られたのだ。

このように「反米ナシヨナリズム」が隆盛を迎えるなかで、同時代の文学や哲学、政治学、芸術運動では「民族」や「国民」に関する言説が多く生成される。具体的には、政治学者である丸山眞男 (一九一四—一九九六年) の「ナシヨナリズム」論や、

中国文学者である竹内好 (一九一〇—一九七七年) の「国民文学」論を挙げることができよう<sup>6)</sup>。当時は大江健三郎 (一九三五年—) でさえ左派の「ナシヨナリズム」に加担していたと言つてもよい<sup>7)</sup>。

以上のような「反米」や「民族」、「国民」に関する同時代言説が生成されていく中で、アメリカ/ソ連の冷戦を背景に、同時代日本の言説空間ではアメリカ論がブームとなる。一九五三年の段階で、雑誌『思想』一九五三年六月号は特集「占領と日本」を組み、雑誌『中央公論』は特集「日本はアメリカの植民地か」を組んでおり、アメリカ軍基地に代表される「占領」という言葉がキーワードになる。それと同時に、一九五〇年代にはアメリカの映画や音楽、ファッション、英語が、テレビやラジオといったメディアをとおして大衆化していった。すなわち、「占領」の記憶が忘却される一方で、「大衆文化」という「消費主義的なアメリカニズム」が拡大していくのだ<sup>8)</sup>。本稿で論じる安部公房のエッセイ「アメリカ発見」もまた、この「占領」と「大衆文化」という二つのアメリカに関する文脈で発表されたものであった<sup>9)</sup>。

一九五〇年代の「反米ナシヨナリズム」の問題については、二〇〇九年の時点で既に、岩崎稔 (一九五六年—) が小森陽一 (一九五三年—)、成田龍一 (一九五一年—) との座談会で、次のように指摘している。

**岩崎** そうですね。たしかに一九五〇年代に「反米愛国闘

争」という路線が選択され、そのスローガンが掲げられ、「民族的……」や「国民的……」という概念がいろんなところへ出てくるわけです。しかしそれが、文字通り本当のナシヨナリズムかどうかということでしょうね。たとえば、沖繩の「祖国復帰運動」のときに日の丸が振られたことをもって、それをナシヨナリズムと呼ぶことが適切な名指しかどうか。ただちにそう呼んでしまったとたん、するつとそこから抜け落ちてしまう当時の企てや格闘がないかどうか……。(40)

ここで岩崎が指摘しているように、いくら「ナシヨナリズム」のように見えるものでさえ、それを「ナシヨナリズム」に還元してしまうと、「するつとそこから抜け落ちてしまう当時の企てや格闘」を無視してしまうことになる。そこで、本稿では一九五〇年代の「ナシヨナリズム」の文脈で語られていたものの内部に、むしろ「ナシヨナリズム」を内部から破壊するものを見いだす作業を行なっていく。

## 二、先行研究と同時代のアメリカ論

安部公房「アメリカ発見」は『中央公論』一九五七年一月号に掲載されたエッセイである。これまで、このエッセイは先行研究でも論じられることが少なかったが、近年では一九五〇年代の安部の芸術運動や政治活動への関心が高まり、日本共産

党の「反米ナシヨナリズム」との関連で論じられてきた。先行研究では、坂堅太『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナシヨナリズム』（和泉書院、二〇一六年一月）において、一九五〇年代の安部の政治性が、安部が所属した日本共産党所感派の「反米ナシヨナリズム」に還元されて論じられている。そして坂は、安部の「アメリカ発見」を、反米に限定されない近代的・大衆的な「ナシヨナリズム」を提示しているという点で評価し、次のように論じている。

この時期の安部にとつて、アメリカは大衆／知識人の乖離を解消する完全な平等を示すイメージとして捉えられていたのである。それはアメリカを敵として把握していた五〇年代前半からの転換を示すのであり、反米という地点から民族主義を立ち上げようとする身振りからの離脱を意味している。それゆえに、安部は大衆社会化の積極性を重視し、そこから新しいナシヨナリズムの可能性を構想していたのだ。(41)

この引用箇所において、坂堅太は、安部が日本の「大衆」の間で人気があったアメリカの「大衆文化」を利用した「新しいナシヨナリズム」を立ち上げたと論じている。この「大衆」とは、「大衆文化」を消費する「大衆」であると同時に、「マルクス主義」が勢力を拡大すべき対象としての「大衆」でもあろう。すなわち、ここでは安部の政治性が「マルクス主義」と「ナシ

「ヨナリズム」に還元されているのだ。しかしながら、当時の安部の政治思想は単純に「ナシヨナリズム」に還元されるのだろうか。

「ナシヨナリズム」には常に、メンバースhipの問題が付きまとう。すなわち、「ネーション」(Nation)の内部/外部の境界線において、誰が内部の「国民」であり、誰が外部の「他者」となるのかという問題である。かつて笹沼俊暁は一九五〇年代以降の左翼運動における「反米ナシヨナリズム」に関して「在日外国系などマイノリティーに対する思想的関心はきわめて薄かった」と述べているが、マイノリティーなどの「他者」の問題は、安部の小説でしばしば取り上げられるものであった。すなわち、「ナシヨナリズム」の対象となる「日本」という「ネーション」の外部の「他者」こそが、見いだされうるだろう。

安部の小説を一九五〇年代の「ナシヨナリズム」に還元するのはなく、むしろ、「ナシヨナリズム」との差異から、安部公房の可能性の中心を見なければなるまい。

前述したように、安部が「アメリカ発見」を発表した一九五〇年代では、冷戦を背景にアメリカ論がブームになっていた。それは当時の日本における海外文学受容にも当てはまり、アメリカを主題とした海外文学の翻訳も行われていた。フランツ・カフカ (Franz Kafka, 1883-1924) の『アメリカ』(Der Verschollene, 1927) を収録した『カフカ全集』第二巻(新潮社、一九五三年四月)、及び、ジャン・ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980) のアメリカ論を収録した『サルトル全集 第一巻——シチュエアシ

オンアメリカ論』(渡辺一夫、佐藤朔、渡辺明正他訳、人文書院、一九五三年七月)はともに一九五三年に刊行されていた。安部の「アメリカ発見」のタイトルの由来となったのは、エッセイ中でも言及され、一九五五年一月に出版されていたウラジミール・マヤコフスキー (Владимир Маяковский, 1893-1930) のエッセイ『私のアメリカ発見』(Мое открытие Америки, 1926) であろう。同時代の日本において、マヤコフスキーが「たんなるエトランゼではなく、わが身をもつてアメリカに祖国を対決させている愛国者として終始している」と評され<sup>(13)</sup>、「愛国者」とみなされていた一方で、安部が発見したアメリカとは、どのようなものだったのだろうか。

次に、安部の「アメリカ発見」の冒頭の箇所を引用する。

私はろくすつばアメリカを知らない。ことわるまでもなく、アメリカの土をふんだこともなければ、系統的にアメリカ文学を研究したこともないのだ。知っていることといえば、話しあつた数人のアメリカ人と、基地で代表されるアメリカの一断面と、あとは映画館のスクリーンなどをおして、私たちの内部にうつしだされたアメリカの影だけである。(四一三頁)<sup>(14)</sup>

この冒頭では、アメリカが「話しあつた数人のアメリカ人」、「基地で代表されるアメリカの一断面」、「映画館のスクリーン」などをとおして、私たちの内部にうつしだされたアメリカの影

といった複数のレヴェルで規定されている。先行研究では、「同時期の「砂川闘争」などに象徴されるきわめて具体的なアメリカ（＝米軍）」と「スクリーン上の光と影の戯れ」としての「（アメリカ的なるもの）」が提示されていると論じられているが<sup>15)</sup>、これは安部がアメリカを「国家」／「文化」というダブル・ミーニングで見ていたことを示唆している。

それでは、同時代の一九五〇年代の日本では、どのようなアメリカ論が展開されていたのだろうか。安部によれば、当時の日本のアメリカ論では、左翼はアメリカの「風俗的なもの」を無視し、右翼はアメリカの「人民資本主義」を批判していたという（四三八頁）。具体的には、安部は『中央公論』一九五六年七月号に掲載された座談会「知米主義の提唱」に言及しており、アメリカ史研究者である中屋健一（一九一〇—一九八七年）の発言に触れ、「つまり、アメリカのいいところというのは、プラグマティックな思考方法などであり、それはつまらぬ風俗的なものから、はつきり区別されて扱われるのだ」と論じている（四三八頁）<sup>16)</sup>。更に、安部は当時のアメリカの資本主義が「人民資本主義」と呼ばれて批判されていたことを受け、次のように書いている。

こと風俗に関するかぎり、反共論者も、これには正面きつて反対することができない。そこでもつばら、政治的に、「人民資本主義」などという新語をもちだしてきたりして、応戦するわけだ。だが、その論争のかけに、アメリカニズ

ムはやはり打ち忘れられてしまう。敵にとつても味方にとつても、それは要するに浅薄で軽薄な通俗文化にしかすぎないわけである。（四三八頁）

すなわち、同時代においてアメリカの資本主義に対する批判が行われたとしても、「アメリカニズム」は「浅薄で軽薄な通俗文化」として「打ち忘れられて」しまっているのだ。このように同時代に無視されてきた「文化」＝「風俗的なもの」に、安部はいかなる政治性を見いだしたのであるうか。

### 三、「対自」としてのアメリカ

#### ——安部公房のサルトル受容と冷戦構造の脱構築

エッセイ「アメリカ発見」において、安部は自身が書きたいと考えているアメリカについて、次のように述べている。

私が書きたいと思ひ、また書かなければならないと思うのは、即自的なアメリカではなく、課題としての、とりわけ日本に対する一種の「犯人」としてのアメリカを発見すること以外にないのだから。（四三五—四三六頁）

この引用箇所における「即自」という言葉が、ジャン＝ポール・サルトルの『存在と無——現象学的存在論の試み』(L'Être et le néant, 1943) に由来することは言うまでもない。同時代の松浪

信三郎（一九三一一一九八九年）訳では、次のようにある。

自己を構成する不断の反省が同一性のなかに溶けこむときには、存在はこの自己そのものである。そういうわけで、存在は、結局、自己のあなたにある。われわれの最初の命題は言語の制約による近似的なものでしかありえない。事実、存在がそれ自体に対して不透明であるのは、まさしくそれがそれ自体によって満たされているからである。このことを、われわれは、「存在は、それがあるところのものである」*l'être est ce qu'il est*、と言うことによつていつそうよく言いあらわすことができるであろう。この命題は、一見したところ、まったく分析的である。事実、同一性原理があらゆる分析判断の無条件的な原理であるかぎり、この命題はどうい同一律に帰せられるものではない。第一、それは特殊な存在領域、すなわち即自存在の領域を指示する。対自の存在は、これに反して、それがあらぬところのものであり、それがあるところのものであらぬものとして、定義されるのを、われわれは見るであろう。<sup>(17)</sup>

以上のように、サルトルの実存主義において、「即自」とは「それがあるところのもの」なのであり、「くである」という「本質」(essence)から絶えず抜け出す自由な「対自」とは逆の存在として位置づけられる。安部が「対自」ではなく「犯人」という言葉を用いているのは、当時ブームになっていたグレア

ム・グリーン (Graham Greene, 1904-1991) の『おとなしいアメリカ人』(*The Quiet American*, 1955) が、『第三の男』(*The Third Man*, 1949) よろしく探偵小説の形式でアメリカを批判していたためだろう。安部はヨーロッパにとつてのアメリカへの幻滅を、「狂気」の一種である無邪気さ(四三四頁)や「無邪気は狂気の種類だ」(四三九頁)と表現しているが、これはグリーンが『おとなしいアメリカ人』においてアメリカのベトナムに対する態度を揶揄した際に用いた「無邪気は狂気の種類なのだ」(innocence is a kind of insanity)<sup>(18)</sup>という言葉に由来するであろう。グリーンが「国家」としてのアメリカを「犯人」として批判したのとは対照的に、安部はアメリカの「文化」を「犯人」として見つけ出そうとしているのだ。

安部は、アメリカにはジャズ (jazz) のように「風俗化」した「新しい形式」があるとし、アメリカの随筆家クレヴェエクール (Michel Guillemin Jean de Crevecoeur, 1735-1813) を引用しながら、次のように述べている。

「昔の偏見と風習を見捨てて、自分の受け入れた新しい生活様式、自分の服従する新しい政治、自分の保持する新しい地位から新しいものを受けとる者、その人をアメリカ人という。」(クレヴェエクール) アメリカ人は、在ったものではなく、作られたものであり、その創成には、人民自身が自覚的に参加しなければならなかったのだ。(四四二頁)

同時代の日本では、クレヴェエクールを引用しながらアメリカの歴史を論じた評論に、斎藤真「民主主義の風土化」(『岩波講座現代思想 第六巻——民衆と自由』岩波書店、一九五七年九月)があった。この評論において斎藤は安部と同じく、クレヴェエクールを引用しながら、「アメリカ人」が如何に「アメリカ人」となるかを論じている。次に、その箇所を引用する。

では何がアメリカ人をつくるのか？ クレヴェエクールは答える。「昔の偏見と風習を見捨てて、自分の受け入れた新しい生活様式、自分の服従する新しい政治、自分の保持する新しい地位から新しいものを受けとる者、その人をアメリカ人という。」と。この移民達の「過去」の排除と「現在」への順応が、人種のルツボとしてのアメリカの統一性の基礎となる。すなわち、人は自然的に、すなわち生れながらにしてアメリカ人になるのではなく、建て前としては自己の自発的選択行為によってアメリカ人となる。<sup>(19)</sup>

以上の引用のように、安部と斎藤がクレヴェエクールのまったく同じ文章を引用している点、及び、「アメリカ人」が如何に「アメリカ人」になるのかという問題を扱っている点で、安部が斎藤の評論をパラフレーズしていることは明瞭である。安部と斎藤で異なっているのは、安部が、アメリカ人が「在ったもの」ではなく、「作られたもの」であることを、実存主義を用いて説明している点である。このように絶えず新しい自己を作

り出す「対自」について、サルトルは『存在と無——現象学的存在論の試み』において、次のように書いている。

対自は自由であり、一つの世界をそこに存するようにさせることができる。それゆえ、対自の自由は、対自の存在としてあらわれる。けれども、この自由は一つの所与でもなく、一つの特性でもないから、この自由は、自己を選ぶことによつてしか存在しえない。対自の自由は、つねに拘束されている。未決定の能力であるような自由、自己の選択に先だつて存在するような自由は、ここでは問題にならない。われわれは、決して、自己を作りつつある選択としてしか、自己自身をとらえることができない。むしろ、自由とは、単に、この選択がつねに無条件であるという事実である。<sup>(20)</sup>

サルトルの言葉で言えば、安部にとつて「アメリカ人」が「それがあるところのものである」「即自」ではなく、「自己を作りつつある選択」としての自由な「対自」であることを意味している、だろう。

このような「アメリカ人」について、安部は「アメリカには一つの神話がある。それは一種独特な、解放された自由な人民という伝説である」として、「神話」という言葉を用いている(四三九頁)。この「神話」について、安部は次のように論じている。

アメリカ大衆の中の「人民神話」は根強く、また強固だったとも言えるのだ。たとえそれが帝国主義に利用され、窒息しかかった孤独な民主主義であるにしても、いざんとして人民の神話なのであり、決して支配階級の神話ではないことはたしかなのである。(四四〇―四四一頁)

すなわち、安部はアメリカの「帝国主義」の内部には還元されえない「孤独な民主主義」、「人民神話」を見いだしているのだ。その「人民神話」の例として、安部は「タウン・ミーティング」(Town meeting)などのアメリカの「ローカルな直接民主制」を評価している(四四〇頁)。つまり、安部はソ連／アメリカ、東側／西側、共産主義／資本主義という二項対立に基づく冷戦構造を超えて、アメリカの内部に「ローカルな直接民主制」を発見しているのだ。ここで示唆されるのは、安部がアメリカの「ローカルな直接民主制」をサルトルの実存主義を媒介にして発見しているということである。

安部の言う「ローカルな直接民主制」とは実存主義的な自由を体現するものであり、常に新しい存在へと自己差異化していく文化そのものである<sup>(21)</sup>。「アメリカ発見」において、この「ローカルな直接民主制」という言葉はアメリカの「人民神話」を指すものとして用いられており、安部の言葉を用いて次のようにその概念を規定することができよう。すなわち、「ローカルな直接民主制」とは、①「解放された自由な「人民」という伝

説」(四三九頁)や「政治参加の平等という原則」(四四〇頁)にもとづいた「人民神話」である。そして、②アメリカという国家の「帝国主義に利用され、窒息しかかった孤独な民主主義」(四四一頁)であり、③「在ったものではなく、作られたもの」(対自存在として「誰の母国にもなかった新しい形式」が「風俗化」(四四二頁)した大衆文化である。そして、④それは黒人という「被支配民族」の文化を「抵抗なく受け入れ、同化しきつた」(四四二頁)ものであった。簡単に言えば、「ローカルな直接民主制」とは、帝国主義に抑圧されつつも、アメリカの大衆文化に存在する、実存主義的な「孤独な民主主義」のことなのだ。

安部が「人民神話」に言及する際に紹介される黒人文化の一例が、前述したジャズなのであった。ここから、ジャズをめぐって安部とサルトルの差異が見いだされるであろう。サルトルは『サルトル全集第一巻——シチュアシオン アメリカ論』に収録されたエッセイ「植民地的ニューヨーク」(『New York, the colonial, 1949』)において、ニューヨークの摩天楼やジャズが「未来よりも多くの過去をその中に蔵している」ことを「過去の憂鬱」として否定的に書いている<sup>(22)</sup>。それに対し、安部は「アメリカ発見」において、ジャズという大衆芸術そのものが「形骸化」しているというサルトルの発言を批判している(四四二頁)。

すなわち、サルトルがジャズを「過去」の象徴と見たのとは対照的に、安部は常に新しい存在へと自己差異化していく「対自」の象徴としてジャズに言及しているのだ。ここには、サルトルの実存主義を応用しながらも、サルトルのアメリカ論を越えよ

うとする安部の可能性の中心があると言つてもよい。

#### 四、アメリカのユートピア社会主義とプラグマティズム ——鶴見俊輔を読む安部公房

安部が、この「ローカルな直接民主制」に言及する際に引用したのが、前述した『岩波講座現代思想 第六巻——民衆と自由』であった。「アメリカ発見」では、この著作に収録された鶴見俊輔（一九三二—一九五五年）の「プラグマティズムの發達概説」への言及が為されていた。

鶴見は戦前、アメリカ留学を行なつてハーバード大学 (Harvard University) で哲学を専攻し、姉である鶴見和子（一九一八—二〇〇六年）と共に戦時中の日本のファシズム (Fascism) に批判的な思想を持つという、特異な家族的背景と留学経験を持った知識人であった。<sup>(23)</sup> 一九四六年に鶴見俊輔は鶴見和子、丸山眞男、武谷三男（一九一—二〇〇〇年）、武田清子（一九一七—二〇一八年）、都留重人（一九二二—二〇〇六年）、渡辺慧（一九一〇—一九九三年）と共に「思想の科学研究会」を發足し、雑誌『思想の科学』（一九四六年五月—一九九六年五月）が創刊された。「思想の科学研究会」からは、思想の科学研究会編『アメリカ思想史』全四巻（日本評論社、一九五〇年六月—一九五一年一月）や思想の科学研究会編『デューイ研究——アメリカ的考え方の批判』（春秋社、一九五二年七月）が出版されており、プラグマティズム (Pragmatism) などのアメリカ思想や、アメリカの映画やテレビといった大衆文化が

考察の対象となつていた。安部公房のエッセイ「アメリカ発見」もまた、同時代のアメリカの大衆文化の日本での受容を、実存主義やプラグマティズムを媒介にして吟味する批評となつており、鶴見俊輔らの「思想の科学研究会」と問題意識を共有していたと言つてもよい。

次に、安部が鶴見の文章をどのように参照しているのかを確認するため、「アメリカ発見」の一部分を引用する。

「プラグマティズムは）……ドイツ観念論から發して主義によつて明確に体系化されるヨーロッパ大陸の社会主義に見おとされている多くの良いものを持つていた。だが同時に、世界史の發達段階についての把握、個人の意志とは独立に歴史を推進する力としての經濟的諸力についての認識を欠くという、アメリカの社会主義思想に独自の盲点をともなつていた。」（鶴見俊輔『プラグマティズムの發達概説』——「現代思想」。(四四〇頁)

この箇所では、安部が「プラグマティズムは）……」というように、鶴見の文章を省略している箇所があることがわかる。それでは次に、安部が参照した鶴見俊輔の「プラグマティズムの發達概説」における当該箇所を引用することで、安部の鶴見受容を考察したい。

初期のアメリカのユートピア社会主義の実験に参加した大

ヘンリー・ジェイムズやブロンソン・オルコットをふくめて、エマソン、ソロー、ホイットマン、オルコット、大ジエイムズ、ジェイムズ、デュレイ、ミードに至るアメリカ思想史の中における独自の社会主義の潮流を考えることができよう。そして、このアメリカ的社会主義は、つねに多元主義の前提の上にたち、開かれた未来への信仰をもち、個人尊重、創意尊重の気風をともなっていた。これらの点では、ドイツ観念論から発してマルクス主義によって明確に体系化されるヨーロッパ大陸の社会主義に見おとされていく多くの良いものを持っていた。だが同時に、世界史の発達段階についての把握、個人の意志とは独立に歴史を推進する力としての経済的諸力についての認識を欠くという、アメリカの社会主義思想に独自の盲点をともなっていた。<sup>(24)</sup>

引用元の鶴見の文章では、「初期のアメリカのユートピア社会主義の実験に参加した」作家としてラルフ・ワルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) やヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) が挙げられ、「独自の社会主義の潮流」、「アメリカ的社会主義」への言及があることは注目に値する。すなわち、安部の言う「プラグマティズム」とは「初期のアメリカのユートピア社会主義」を指すものなのだ。のちに鶴見は「方法としてのアナキズム」(『展望』一九七〇年一月号)においてソローをアナキストとして評価しており、この

ことから、鶴見と安部が、従来のツリー型の「マルクス主義」を相対化するような視座を、アメリカを媒介にして見いだしていたことが窺える。

以上のようにアメリカに従来の「正統派マルクス主義」を乗り越えるものを見いだす傾向は、一九八〇年代以降のポストモダン (Postmodern) にも存在する。例えば、批評家、柄谷行人 (一九四一年-) は『哲学の起源』(岩波書店、二〇二二年一月)において、古代ギリシアにおける「無支配」を意味する「イソノミア」(isonomia) をアメリカのフロンティアにおける「遊動性」などに見いだしている。<sup>(25)</sup>

かつて上野俊哉 (一九六二年-) は『思想の不良たち——1950年代 もう一つの精神史』(岩波書店、二〇二三年三月)において、日本のフランスの戦後思想の関係性を、「トランスローカル」(Translocal) な横断性として示したが<sup>(26)</sup>、本論においても安部や鶴見とフランスのポストモダン思想との「トランスローカル」な結びつきを示したい。ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze, 1925-1995) は『批評と臨床』(Critique et Clinique, 1993) において、「アメリカ人の使命」を、次のように説明している。

ただし、アメリカ人の使命とは、「昔ながらの国家機密」を、つまり国民だとか、家族だとか、遺産だとか、父親だとかを再構築することではなく、なによりも世界を、兄弟の社会を、人間と財の連邦を、アナキストとしての個人から成る共同体を構築することであり、それはジェファー

ソンやソローやメルヴィルによつて植え付けられた使命である。<sup>(27)</sup>

ドウルーズがここで「アナキストとしての個人から成る共同体を構築すること」と述べていることは、鶴見、安部、ドゥルーズ、柄谷という自由な社会主義、「アナキズム」の水脈があることを示唆していると言つてもよい。以上のことは、一九五〇年代の安部がサルトルと鶴見を媒介にすることで、従来の「正統派マルクス主義」を越えようとしていたことを意味する。

そして、そのようなアメリカの「ローカルな直接民主制」と「人民神話」を表現する「大衆文化」として、安部がジャズだけでなく「推理小説におけるハードボイルド」や「映画におけるセミ・ドキュメンタリー」、「ミュージカルス」に言及していることは特筆に値する(四四三―四四四頁)。というのも、「セミ・ドキュメンタリー」や「ハードボイルド」といった「大衆文化」のジャンルは、安部が一九六〇年代に『砂の女』や『燃えつきた地図』といった作品を執筆する際に用いたものだからである。こういったアメリカの大衆的な表現形式は、如何に一九六〇年代の安部によつて受容されたのであろうか。

## 五、一九六〇年代における「都市」、「アメリカ」、「アナキズム」

かつて石川巧は高度経済成長期(一九五四―一九七三年)に「国家・民族・伝統といった枠組みで思考することを止め」た作家として安部公房の名を挙げていたが<sup>(28)</sup>、その背景には一九六〇

年代の都市化があつたと言つてもよい。一九七二年に田中角栄(一九八一―一九九三年)が『日本列島改造論』(日刊工業新聞社、一九七二年六月)において地方の都市化を提唱したように、一九六〇年代には「向都離村」が生じ、一九七〇年代には地方の都市化が行なわれていく<sup>(29)</sup>。

こういった都市化が進むにつれ、「都市」をめぐる同時代言説もまた生成されていく。例えば、一九六八年には「マルクス主義」系歴史学者、羽仁五郎(一九〇一―一九八三年)の『都市の論理』(勁草書房、一九六八年七月)がベストセラーになっている。もつとも、苅部直が述べたように、羽仁の「都市」が「マルクス主義」的であるという点で、安部の「都市」とは差異があるだろう<sup>(30)</sup>。しかし、フランスの「マルクス主義」系社会学者アンリ・ルフェーブール(Henri Lefebvre, 1901-1991)が『都市への権利』(Le droit à la ville, 1968)において、プロレタリアートの「新しい人間主義」の舞台として「都市」を提示したように、一九六〇年代に「都市」が「革命」の場として見なされるようになったと言つてもよい<sup>(31)</sup>。当時の「盛り場」であつた新宿では、「新宿騒乱」(一九六八年一〇月二日)などベトナム反戦運動や学生運動が展開されただけでなく、唐十郎(一九四〇年―)などのアンクラ演劇が行なわれており、新宿に代表される「都市」は政治的／芸術的にも革新的な空間であつた<sup>(32)</sup>。また、西川長夫によれば、ルフェーブールの唱えた「祭り」と「自主管理」が五月革命に影響を与えたというが、このことは「マルクス主義」の内部に「自主管理」という「アナキズム」的な要素があることを

示唆している。<sup>(33)</sup>

同様に、安部のエッセイ集『内なる辺境』（中央公論社、一九七一年一月）において提示されたのは、「国家」を内部から破壊する「内なる辺境」としての「都市」であった。この「都市」とは、「国家」によって領土化された「条理空間」(espace strict)ではなく、むしろ脱領土化されたアナキーな「平滑空間」(espace lisse)だと言ってもよい。かつて桂秀実（一九四九年）は当時の学生運動について、「条理空間から平滑空間へ」と述べたが<sup>(34)</sup>、このことは「都市」を改革のための空間と捉えた「内なる辺境」と学生運動がパラレルな関係にあることを示唆する。すなわち、安部にとって学生運動を行う若者たちは「都市の遊牧民」なのだった。ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ(Pierre-Félix Guattari, 1930-1992)は『千のプラトー——資本主義と分裂症』(Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2, 1980)において、「都市の遊牧民」について次のように述べている。

砂漠であろうと草原であろうと海であろうと、条理化して住むことができる。都市においてさえ平滑的に住むこと、都市の遊牧民となることができる（たとえば、クリシーやブルックリンでのヘンリー・ミラーの散歩は平滑空間での遊牧民的移動であり、ミラーは都市が一つのパッチワーク、速度の微分、遅滞と加速、方向転換、連続変化を吐き出すように促すのだ。ビートニクはミラーに多くのものを負っているが、彼らは彼らでまた方向を変え、都市外の空間の

新しい使用法を作り出すだろう。<sup>(35)</sup>

ドゥルーズ&ガタリの言葉で言えば、安部は「都市においてさえ平滑的に住むこと、都市の遊牧民となること」を目指していたと言ってもよい。安部の『燃えつきた地図』（新潮社、一九六七年九月）において描かれているのは、そのような「都市」を舞台にした「失踪」であった。『燃えつきた地図』では、失踪者を探す探偵が逆説的に「失踪」するまでが描かれている。そして、安部が「探偵小説」や「ハードボイルド」といったジャンルを受容する際に参照したのが、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-1849)やダシール・ハメット(Dashiell Hammett, 1894-1961)といったアメリカ文学であった。<sup>(36)</sup>このことが示唆するのは、安部の「アメリカ発見」の言葉で言えば、まさに「文化」としてのアメリカをとおして、「国家」からの「失踪」が行われているということである。すなわち、安部の「アナキズム」はアメリカ文学を媒介にして形成されたものであると言ってもよい。

安部が用いた「都市」という言葉は、イギリス文学の伝統においては「都市」／「田舎」という二項対立にもとづいて用いられてきた。イギリスの「マルクス主義」系批評家レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams, 1921-1988)の『田舎と都会』(The Country and the City, 1973)に代表されるように、この二分法はイギリス文学に顕著なものであった。安部は「都市」の特質を、その移動性に求めているが、そのような移動性はまた、アメリカ

カ文学の特質とも言えるのではあるまいか。

一九六〇年代初頭の「都市」への人口集中が進む時代に、安部は『砂の女』（新潮社、一九六二年六月）において「沙漠」を描いていた。「都市」との対比において「沙漠」を描くことは、イギリス文学のように「都市」に対して「田舎」を描くようなものであるように見えるかもしれない。『砂の女』においては、「沙漠」の部落において、「愛郷精神」という言葉が使われているように<sup>(37)</sup>、これは「都市」に対して「ローカル」な「田舎」であると言える。しかし、この「沙漠」は「都市」／「田舎」といった二項対立には還元されえないものとして描かれている。それは、「辺境」としての「都市」との同質性が「沙漠」に見いだされている点、そして、主人公が定着的な「田舎」としての部落に対して距離を取っており、「沙漠」での流動というノマドロジーが提示されている点において、「都市」／「田舎」という二項対立には収まりきれないのだ<sup>(38)</sup>。

以上のことが指し示すのは、安部がイギリス文学研究やアメリカ文学研究における「都市」／「田舎」という二項対立を受容しながらも、それを改変し、「国家」に対抗するものとして「都市」と「辺境」を描いているということである。

このように一九六〇年代に安部は「アナキズム」に接近するのだが、これを同時代の「アナキズム」の文脈において、どのように位置づけることができるだろうか。一九六〇年代は、「アナキズム」が再び脚光を浴びる時代であった。具体的には学生運動が活発化することで、「アナキズム」系のセクトが出現し、

また、思想史の分野でも従来とは異なった新たな「アナキズム」論が提示された時期でもあった。当時はジョージ・ウドコック『アナキズム』(Anarchism: A History of Libertarian Ideas and Movements, 1962)の日本語訳『アナキズム』全二巻(白井厚訳、紀伊国屋書店、一九六八年六月)など、「アナキズム」研究では基本的な文献が出版され始めていた。そして批評としては、戦後民主主義者である小児科医、松田道雄(一九〇八―一九九八年)と、当時、ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合、一九六五―一九七四年)でベトナム反戦運動を行っていた鶴見俊輔の著作において、「アナキズム」をめぐる言説が提示されたと言ってもよい<sup>(39)</sup>。松田の著作はこれまで「アナキズム」関連の思想史からは漏れてきた三好十郎(一九〇二―一九五八年)や埴谷雄高(一九〇九―一九九七年)といった作家をアナキストとして評価しており<sup>(40)</sup>、従来の「アナキズム」を刷新するものであった。そして、松田が「正統派マルクス主義」から「アナキズム」に接近した背景には、ソ連の一国社会主義への幻滅があったと言ってもよい<sup>(41)</sup>。

同様のプロセスが安部の文学活動にも見いだされ、安部が一九五六年の東欧旅行を境にして日本共産党への懐疑を深め、その後、一九六二年に除名、一九六八年にソ連が「プラハの春」(Prague Spring)に軍事介入を行った際には、ソ連という「国家」への批判を行うようになる。これは、安部が「資本」だけでなく「国家」に対しても批判の目を向けているということだ。同じ一九六〇年代にアメリカはベトナム戦争を行っており、安部はそのような戦争を行う「国家」そのものを批判しているのだ。

以上のように、一九六〇年代に安部が「アナキズム」に近くという事実を迂回して、安部のエッセイ「アメリカ発見」をいかに読み直すことが可能となるだろうか。ここで注目したいのは、このエッセイが一九六〇年代に改稿されていることである。「アメリカ発見」は初出の『中央公論』一九五七年一月号に掲載されたのちに、エッセイ集『猛獣の心に計算機の手を』（平凡社、一九五七年二月）に収録されているが、一九六〇年代に『砂漠の思想』（講談社、一九六五年一月）に収録される際に改稿が行われているのである。次に、改稿前のエッセイの最後の二段落を引用する。

既成の概念をふりすてて、現実を直視してみよう。明治権力の形成過程などについても、ヨーロッパ流の民主化概念で説明しきってしまうのではなく、アメリカの特殊性と対応させてみたりすることで、案外新しい発見がありうるのではなからうか。良いと思われていたものが、案外つまらないものであったり、つまらないと思われたものに、かえって貴重なエネルギーがかくされていたりすることも、十分にありうるわけである。

もともと日本のアメリカナイズには、CIAなどが手をつけてよるこんでいるということだ。なるほどいささか、気になりはする。しかし、日本人のことは日本にまかせてもらいたいという点で、気にかかるとは思わなかった、彼らの評価や判断などは、やはり問題にするに足らないのだと思

う。——悪をなさんと欲して善をなすのは、何もメフィストフェレスだけとはかぎらないのだ。もしかすると、そのCIAの役人はヨーロッパかぶれしていて、アメリカニズムに内包されている人民性には気づいていないのかもしれない。（四四五頁）

この引用箇所では、アメリカの「CIA」に代表される国家権力は「日本のアメリカナイズ」を喜んでいるが、そこには国家権力が気づかない「アメリカニズムに内包されている人民性」があることが示されている。すなわち、アメリカによる占領政策が進められながらも、逆説的にそのような占領政策を内部から破壊するような「人民性」もまた存在したというわけだ。また、この引用箇所では、「日本人のことは日本にまかせてもらいたい」というフレーズが用いられており、一九五〇年代の「反米ナシヨナリズム」が想起されると言ってもよい。

しかしながら、このエッセイの最後の箇所は一九六〇年代に大幅に改稿され、次のようになる。

既成の概念をふりすてて、現実を直視してみよう。明治権力の形成過程などについても、ヨーロッパ流の民主化概念で説明しきってしまうのではなく、アメリカの特殊性と対応させてみたりすることで、案外新しい発見がありうるのではなからうか。——悪をなさんと欲して善をなすのは、なにもメフィストフェレスだけとはかぎらないのである。<sup>(42)</sup>

改稿後は最終段落が大幅に書き直されており、アメリカの「CIAの役人」や「日本人のことは日本にまかせてもらいたい」といったフレーズが削除されている。一九六二年二月七日に安部公房の日本共産党からの除名が公表されており、エッセイ「アメリカ発見」の改稿が行われた『砂漠の思想』が出版された一九六五年一〇月の時点で、すでに安部は日本共産党から除名されていた。すなわち、当時の安部は「反米ナショナリズム」から距離を取り、より自由な立場で批評活動を行なっていたと言ってもよい。以上のような一九六〇年代のコンテクストを背景に、「アメリカ発見」の改稿が行われる際には、一九五〇年代の「反米ナショナリズム」を想起させるフレーズが削除されていたのであった。

## 六、おわりに

これまで一九五〇年代の文学や思想は、冷戦期の「反米ナショナリズム」との関連で論じられることが多かった。具体的には、竹内好や丸山眞男は、東アジアで勃興する「ナショナリズム」を受け、「ナショナリズム」論を展開していくことになる。同時代には日本共産党もまた「反米ナショナリズム」を掲げており、左派全体に「ナショナリズム」の雰囲気があったと言ってもよい。そのため、一九五〇年代の安部公房の文学作品もまた当時の日本共産党の「ナショナリズム」に還元して読まれる

傾向が存在する。しかしながら、安部は一九六〇年代に「アナキズム」に接近しており、一九五〇年代の安部の政治性を「マルクス主義」や「ナショナリズム」に還元しても良いのだろうか。本稿では以上のような問題意識から、安部公房のエッセイを、同時代のアメリカをめぐる言説のネットワークの内部に位置付けて読む作業を行った。

戦後の日本において、アメリカの映画やドラマ、音楽といった「大衆文化」がテレビやラジオといったメディアをとおして消費されていったように、一九五〇年代にはアメリカに関する多くの言説が生成されていく。海外文学の翻訳においても、フランツ・カフカ『アメリカ』、ジャン＝ポール・サルトル『サルトル全集 第一巻——シチュアシオン アメリカ論』、ウラジミール・マヤコフスキー『私のアメリカ発見』、グレーム・グリーン『おとなしいアメリカ人』が出版されており、安部のエッセイ「アメリカ発見」もまた、このアメリカ論の文脈で読まれうる。このエッセイにおいて、安部はサルトルの実存主義を媒介にししながら、「対自」としての自由なアメリカ文化を評価し、そこに「ローカルな直接民主制」を発見する。それは、東側／西側、ソ連／アメリカ、共産主義／資本主義という冷戦構造に対して脱構築 (deconstruction) を行う、実存主義的な「デモクラシー」の発見でもあった。

また、安部がアメリカの「大衆文化」を受容する際に参考にしたのが、鶴見俊輔のアメリカ論であった。鶴見の著作をおしてアメリカのプラグマティズムを受容した安部は、「プラグ

「マティズム」という言葉を、ヘンリー・デイヴィッド・ソローの「初期のアメリカのユートピア社会主義」を指すものとして用いていた。このことは、安部がソ連に代表されるツリー型の「正統派マルクス主義」を相対化する視座を、鶴見やサルトルを媒介にして得たことを意味している。

そして、安部は「セミ・ドキュメンタリー」や「ハードボイルド」をアメリカ文化として評価するが、こういったジャンルは安部が一九六〇年代の長編小説で用いたものであった。また、一九六〇年代に安部は「アナキズム」に接近しているのであり、この「アナキズム」の萌芽を、一九五〇年代のエッセイ「アメリカ発見」に見いだすことができるのである。また、一九六〇年代におけるエッセイ「アメリカ発見」の改稿過程からも、安部が意図的に一九五〇年代の「反米ナショナリズム」を想起させるフレーズの削除を行っており、そこから安部の「マルクス主義」に対する距離感が窺われる。

もちろん、安部が評価したアメリカ文化は、冷戦期におけるアメリカの覇権戦略の結果として、日本において消費されたものであった。しかしながら、安部はそこにアメリカの「帝国主義」には還元不可能な「ローカルな直接民主制」を発見することとで、「帝国主義」を内部から脱構築しているのである。エッセイ「アメリカ発見」では、「ナショナリズム」に陥ることなくアメリカ文化を語ることで、「正統派マルクス主義」もまた脱構築されていると言つてもよい。

#### 【注記】

1 「サークル運動」における「生活記録」と「ナショナリズム」の結びつきに関しては、「マルクス主義」系歴史学者、石母田正（一九二一—一九六六年）が提唱した「国民的歴史学運動」が果たした役割が大きい（鳥羽耕史「サークル運動と生活記録」（『90年代——「記録」の時代』河出書房新社、二〇一〇年二月）四一—四四頁）。しかしながら、本稿では「サークル運動」を「マルクス主義」的な「ナショナリズム」に還元する立場を取らない。それは、九州で谷川雁（一九三—一九九五年）らが編集を行ったサークル誌『サークル村』（一九五八—一九六一年）のように、日本共産党の影響を受けながらも、そこから脱逸し、「自主性」や「自発性」の観点から独自の発展を遂げたサークル誌があったからである（森元斎「炭鉱と村」（『国道3号戦——抵抗の民衆史』共和国、二〇二〇年七月）二一九頁）。

2 ベネディクト・アンダーソン「序文」（山本信人訳『三つの旗のもとに——アナキズムと反植民地主義的想像力』N T T出版、二〇二二年三月）二頁

3 三宅芳夫「二つの戦後思想——ユーラシアの両端で——」（『ファシズムと冷戦のはざま——戦後思想の胎動と形成 1945-1960』東京大学出版会、二〇一九年一〇月）三八六頁。同書では、「国際冷戦レジーム」においてアメリカの共産主義封鎖戦略の「緩衝地帯」となった日本、フランスの戦後思想が論じられている。具体的には、三木清（一八九七—一九四五年）や花田清輝（一九〇九—一九七四年）、ジャン・ポール・サルトル、ジャック・デリダ（Jacques Derrida, 1930-2004）の戦後思想が、①「ファシズム」(Fascism) への抵抗、②「正統派マルクス主義」との差異、③

「国際冷戦レジーム」に対抗する「中立主義」から論じられており、本稿では同書全体を参照した。

4 岩崎稔『戦後日本革命の挫折』(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大他編『戦後日本スタディーズ①40・50年代』紀伊国屋書店、二〇〇九年九月) 二四—一三〇頁

5 三宅芳夫「竹内好における「近代」と「近代主義」——丸山眞男との比較を中心に——」(『ファシズムと冷戦のはざままで——戦後思想の胎動と形成 1950-1960』東京大学出版会、二〇一九年一〇月)では、日本共産党の「対米独立闘争」や「国民文学論争」を背景に、一九五〇年代の丸山眞男と竹内好が共通して「国民国家」への帰属を自明視し、「デモクラシー」(Democracy)と「ナシヨナリズム」を結びつけるという「近代」的な試みを行っていたことが詳細に論じられている(二三—二四五頁)。

6 佐藤泉「竹内好」(『一九五〇年代、批評の政治学』中央公論新社、二〇一八年三月)では、竹内好の「国民文学」論が、日本浪漫派の近代主義批判や、敗戦の体験、アジアのナシヨナリズムに基づくことが論じられている(三四—三七頁)。

7 大江健三郎は『ヒロシマ・ノート』(岩波書店、一九六五年六月)刊行後にアメリカ旅行を行っており、その旅行の内容は「アメリカ旅行者の夢」(『世界』一九六六年九月号—一九六七年一〇月号)にまとめられている。この中で、大江は「日本人の新しいナシヨナリズム」を確立するためにマーク・トウェイン(Mark Twain, 1835-1910)の『ハックルベリー・フィンの冒険』(Adventures of Huckleberry Finn, 1853)の主人公ハック(Huck)を「アメリカに癒着していない自由なヒーロー」として評価している(服部訓和『ハックルベリー・フィンのアメリカ——『沖繩ノ

ート』とユダヤ系アメリカ人の身体——」(『日本近代文学』第八九巻、二〇一三年一月)一二七頁)。すなわち、大江は一九六〇年代にアメリカ文学を受容しながらも逆説的に「反米ナシヨナリズム」を提示しているのである。一方で、一九六〇年代の安部は「ナシヨナリズム」批判を展開しており、安部と大江の政治性は共通して左翼的なものでありながらも好対照を成す。

8 吉見俊哉「アメリカ・占領・ホームドラマ」(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大他編『戦後日本スタディーズ①40・50年代』紀伊国屋書店、二〇〇九年九月)二一一—二二二頁

9 その後、日本の「大衆文化」の側からも日本の「対米従属」を批判する作品が生まれていることは特筆に値する。例えば、大澤真幸(一九五八年—)は、沖繩出身の金城哲夫(一九三八—一九七六年)脚本の特撮『ウルトラマン』(TBS、円谷プロダクション、一九六六年七月—一九六七年四月)から庵野秀明(一九六〇年—)総監督・脚本の映画『シン・ゴジラ』(東宝、二〇一六年七月)に至るサブカルチャー(Subculture)に「対米従属」を破るものを見いだしている(大澤真幸「対米従属の縛りを破れるか」(『サブカルルの想像力は資本主義を超えるか』角川書店、二〇一八年三月)四二—五二頁)。近年では、このような日本の「対米従属」を批判するサブカルチャーの水脈に、ロボットアニメ『コードギアス 反逆のルルーシュ』(サンライズ、二〇〇六年一〇月—二〇〇七年七月)、及びその第二期『コードギアス 反逆のルルーシュR2』(サンライズ、二〇〇八年四月—九月)などを加えてもよい。

10 岩崎稔、小森陽一、成田龍一「ガイドマップ40・50年代」(岩崎稔、上野千鶴子、北田暁大他編『戦後日本スタディーズ①40・50年代』紀伊国

屋書店、二〇〇九年九月、二六頁

11 坂聖太「アメリカ」とナシヨナリズム」(『安部公房と「日本」——植民地／占領経験とナシヨナリズム』二二五頁

12 笹沼俊暁「文学者」としての「リービ英雄」(『リービ英雄——(鄙)の言葉としての日本語』論創社、二〇一一年二月) 七六頁

13 鹿島保夫「あとがき」(『ヴェ・ヴェ・マヤコフスキー』私のアメリカ発見) 鹿島保夫訳、和光社、一九五五年一〇月) 二四六頁

14 初出版の安部公房「アメリカ発見」(『中央公論』一九五七年一月号)を引用する場合には、特に断りのない限り、『安部公房全集』第七卷(新潮社、一九九八年二月)から引用し、本文中に頁数を示す。以下同。

15 森山直人「(砂)の闘争、(砂)の記録——あるいは安部公房における「アメリカ的なもの」について」(鳥羽耕史編『安部公房メディアの越境者』森話社、二〇一三年一月) 二四三頁

16 安部はこのエッセイで、座談会「知米主義の提唱」が『世界』昭和三十一年七月号」に掲載されていると述べているが、これは『中央公論』一九五六年七月号の間違いだと思われる。『中央公論』一九五六年七月号では特集「日米関係の再検討」が組まれ、堀江薫雄「米ソ両陣営の経済競争と日本の立場」や鶴見俊輔「日本知識人のアメリカ像」、三宅晴輝「アメリカの占領政策」、赤松要他「日米経済の将来」、鶴見良行「基地周辺の人々」、樋口哲也「市民生活とアメリカ資本」、大谷省二「東京の中のアメリカ」、あるいは「対米関係をめぐる国会議事録」などが収録されており、冷戦下における日米関係に焦点が当てられていた。安部はこの『中央公論』一九五六年七月号の翌年に刊行された『中央公論』一九五七年一月号において、エッセイ「アメリカ発見」を発表することで、同誌

で展開されたアメリカ論に対する応答を行なっているのである。

17 ジャン＝ポール・サルトル「緒論 存在の探求」(『存在と無——現象学的存在論の試み』第一巻、筑摩書房、二〇〇七年一月) 六五頁。傍点原文。

18 グレアム・グリーン『グレアム・グリーン選集12 おとなしいアメリカ人』(田中西二郎訳、早川書房、一九六〇年二月) 一六六頁。Graham Greene: *The Quiet American*. (New York: The Viking Press, 1955.) 157. 安部がグリーンのおとなしいアメリカ人から「無邪気」という言葉を引用しているのは、この言葉が『おとなしいアメリカ人』の中でキー・ワードになっただけでなく、日本での受容においても重要なものだったからであろう。例えば、『毎日新聞』一九五六年七月二日付の学芸欄では、当時、ベストセラーとなっていた『おとなしいアメリカ人』に関する記事「無邪気なデモクラシー——「おとなしいアメリカ人」を読んで」が掲載され、ドナルド・キーン(Donald Keene, 1922.) や武田泰淳(一九二一九七六年)、加藤周一(一九一九一〇〇八年)、阿部知二(一九〇三—一九七三年)が書評を寄せていた。この記事では、その「無邪気」という言葉が、「ヴェトナム人の血がいくら流されても、アメリカの使命達成のためには問題にならない」ことが「狂気の一種なのだ」ということに言及する際に用いられており、アメリカの「無邪気なデモクラシー」が批判されていた。安部が「アメリカ発見」において行ったのは、このような「無邪気なデモクラシー」とは異なった、もう一つの「デモクラシー」を発見する試みだったと言ってもよい。

19 斎藤真「民主主義の風土化」(『岩波講座現代思想 第六巻——民衆と自由』岩波書店、一九五七年九月) 四六頁

- 20 ジャン＝ポール・サルトル「ある」と「為す」——自由」（『存在と無——現象学的存在論の試み』第三巻、筑摩書房、二〇〇七年一月）一三三—三三三頁
- 21 宮本陽一郎は冷戦期のアメリカ文化・研究の拡大について、次のように述べている。「アメリカ合衆国が世界に発信したアメリカ研究が、アメリカ批判をも問題なく許容しうるリベラルな性格であったからこそ、アメリカ研究はグローバルに浸透し、そのようにして醸成されたソフトパワーによって、アメリカ合衆国の文化外交政策は、少なくともソビエト連邦に対しては勝利を収めたのである」（宮本陽一郎「アメリカ、アメリカ！」（『アトミック・メロドラマ——冷戦アメリカのドラマトウルギ——』彩流社、二〇一六年三月）一四—一五頁）。このように「アメリカ批判」という自己言及的な批判をも含んだアメリカ文化・研究とは、安部が「アメリカ発見」において評価した、絶えず自己差異化していくアメリカ文化と共通するものであろう。そして、安部が同時代に受容した鶴見俊輔らのアメリカ研究もまた、そのようなりベラルな性格を有していただろう。
- 22 ジャン＝ポール・サルトル「植民地的都市ニューヨーク」（渡辺一夫、佐藤朔、渡辺明正他訳『サルトル全集第一巻——シチュアシオンアメリカ論』人文書院、一九五三年七月）四五頁
- 23 三宅芳夫「二つの戦後思想——ユーラシアの両端で——」四頁
- 24 鶴見俊輔「プラグマティズムの発達概説」（『鶴見俊輔集第一巻——アメリカ哲学』筑摩書房、一九九一年二月）二八九—二九〇頁
- 25 柄谷がこのような「理念」を提示する背景には、ポストモダンが「理念」（大きな物語）や「コミュニズム」を嘲笑する間に、それが「たんに資本主義のそれ自体ディコンストラクティブな運動を代弁するものにかならなくなった」からである（柄谷行人「序文」（『トランスクリティーク——カントとマルクス』岩波書店、二〇一〇年一月）六—九頁）。柄谷の「イソノミア」論に関しては、柄谷行人「哲学の起源」（岩波書店、二〇一二年一月）を参照。安部と柄谷を比較した場合、時代的なコンテクストが大きく異なるが、「正統派マルクス主義」を乗る越えるために、両者が共通して「アナキズム」に接近していることは興味深い。
- 26 上野俊哉「思想の不良たち——1950年代 もう一つの精神史」岩波書店、二〇一三年三月）一五—一七頁
- 27 ジル・ドゥルーズ「パートルビー、または決まり文句」（守中高明、谷昌親訳『批評と臨床』河出書房新社、二〇一〇年五月）一七—一七八頁
- 28 石川巧「序論」（『高度経済成長期の文学』ひつじ書房、二〇一二年二月）二—一頁
- 29 上野千鶴子「高度成長期と生活革命」（岩崎稔、上野千鶴子、北田晁大他編『戦後日本スタディーズ②60・70年代』紀伊国屋書店、二〇〇九年五月）一六—一六八頁
- 30 荻部直「都市の夢語り」（『安部公房の都市』講談社、二〇一二年二月）二—六頁
- 31 アンリ・ルフェーブル「都市、都市的なるもの、および都市計画についてのテーゼ」（森本和夫訳『都市への権利』筑摩書房、二〇一一年九月）二—五頁
- 32 吉見俊哉「盛り場の一九七〇年代」（『都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史』弘文堂、一九八七年七月）二—七頁

- 33 西川長夫「知識人の問題」(『パリ五月革命私論——転換点としての68年』平凡社、二〇一一年七月)三三二頁
- 34 桂秀実「無党派市民運動と学生革命」(『1968年』筑摩書房、二〇〇六年一〇月)一四六頁
- 35 ジル・ドウルーズ、フェリックス・ガタリ「平滑と条理」(宇野那一、小沢秋広、田中敏彦他訳『千のプラトール——資本主義と分裂症』河出書房新社、一九九九年九月)五三七―五三八頁
- 36 安部公房とポーの関係については、Patricia Mervale "Gunshoe Gothic: Poe's "The Man of the Crowd" and His Followers." (*Detecting Texts: The Metaphysical Detective Story from Poe to Postmodernism*. Eds. Patricia Mervale and Susan Elizabeth Sweezy. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1999.)を参照。ハメットとの関係については、丁熹貞「安部公房のハードボイルド受容と『燃えつきた地図』——「記録性」との関連を視座として」(『超越文化科学紀要』第一七号、二〇一二年一月)を参照。ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864)との関係については、拙稿「安部公房『燃えつきた地図』とナサニエル・ホーソン「ウェイクフィールド」——安部公房のアメリカ文学受容とジャン・ポール・サルトル、大橋健三郎」(『九大日文』第三三三号、二〇一四年三月)を参照。
- 37 安部公房『砂の女』(『安部公房全集』第一六巻、新潮社、一九九八年二月)一一七、一三六、二二二頁
- 38 拙稿「越境する『砂の女』——安部公房、T・S・エリオット、ポール・ボウルズ」(『跨境 日本語文学研究』第三号、二〇一六年八月)を参照。
- 39 拙稿「安部公房、その政治性の変遷——『安部公房全集』全30巻におけるアナキズム用例データベース作成とその分析——」(『日本文化學報』第八〇輯、二〇一九年二月)では、安部公房の日本共産党からの離脱を、松田道雄や花田清輝との同時代的な関係性から考察している(二七四―二七六頁)。
- 40 松田道雄「大杉以後のアナーキズム」(『現代思想体系第一六巻 アナーキズム』筑摩書房、一九六三年一〇月)四〇三―四三三頁
- 41 松田道雄は戦後、ソ連によるハンガリー動乱(一九五六年一〇―十一月)への武力介入に対して失望を感じたという(河合蘭「松田道雄——母親たちとともに」(栗原彬編『ひとびとの精神史第三巻 六〇年安保——1960年前後』岩波書店、二〇一五年九月)三二九―三三一頁)。
- 42 安部公房「アメリカ発見」(『砂漠の思想』講談社、一九九四年一月)三七七頁
- 43 鳥羽耕史「視覚の手ざわりへ——『砂の女』1962」(『運動体・安部公房』一葉社、二〇〇七年五月)二五六頁
- 【付記】本稿は博士論文『一九六〇年代安部公房文学の比較文学的研究——『砂の女』、『燃えつきた地図』、『内なる辺境』——』(九州大学地球社会博甲第四七号、二〇二〇年九月)における「序章」の一部分に大幅な加筆・修正を行ったものである。審査を行って頂いた先生方に記して感謝申し上げたい。
- (台湾・國立國防大學語文中心専任教師)